

保育所・幼稚園と小学校の接続に関する研究

～幼児の主体性を高めるための運動遊びにおける環境構成の工夫～

高知市立横浜小学校 教諭 横山 彩
高知県教育センター 指導主事 宇津本 亜紀
チーフ 岡林 律子

本研究の目的は、主体的に遊びを選ぶ場面で、自ら身体を動かす運動に取り組むようになる子どもを育てるための指導内容を考えることであった。子どもたちに「生きる力」をつけるためには、健やかな心と体は必要であり、それには幼児期から運動の楽しさを味わわせることが重要である。そこで、保育所の年長児の遊びの実態を調査し、県の「全国体力調査」結果から見えた課題も踏まえて、子どもが夢中になって遊び込むような環境構成を工夫した運動遊びを実施し、子どもの変容を分析した。その結果、保育者が小学校体育科への接続や、多様な動きを経験させることを意識するとともに、子どもの主体性を生かした環境構成を工夫した運動遊びを行えば、子どもの動きは活発になり、運動する意欲も高まることが明らかになった。

〈キーワード〉 保幼小の接続、主体性、運動遊び、環境構成、多様な動き

1 研究目的

我が国では、平成23年に制定されたスポーツ基本法を受けて、文部科学省から平成24年3月に「スポーツ基本計画」が策定された。その中で「積極的にスポーツをする子どもとそうでない子どもの二極化については、小学校の早い段階からその傾向が認められるとともに、小学校低学年においては、明確な体力の向上傾向は認められないこと等から、幼児期からの積極的な取組が重要となってくる。」としている。

県の平成26年度「全国体力・運動能力、生活実態等調査」（以下、全国体力調査とする）結果では、「運動をすることがきらい」、「運動をすることが苦手」と回答した児童の割合は、小学校の男女ともに全国平均を上回っている。また1週間の総運動時間が「60分未満」と回答した割合も全国平均を上回っている。第1学年でも「運動することがきらい・ややきらい」を合わせると男子は8%、女子は7%であり、「運動することが不得意・やや不得意」を合わせると、男女とも19%という結果だった。1学期にこの調査が実施されたことを考えると、幼児期に自ら体を動かす心地よさを味わう機会を作り、運動が好きと思える子どもを育てることが必要である。

これまで1年生の担任を経験する中で、体育の授業が好きな子どもが多くいる一方で、運動することに苦手意識がある子どもが1割程度おり、授業への意欲が低いことが気になっていた。授業の中でいろいろと工夫してみたが、楽しんで体を動かしている姿はあまり見られなかった。その中でも特に気になる男子児童がいた。その児童は、体育の授業でいつも無気力なことのほかに、「外に遊びに行かない」「友だちとうまく関われない」等いくつか気になる点があった。本人や保護者と話すうちに、今までに園であまり外遊びをしなかったことや、家庭でも室内で遊んでいることを知り、外で体を使って遊んだ経験が不足していることが分かった。本来、子どもは体を動かすことが好きであると言われている。しかし、「技能を習得する」ことへの意識が強い保育・教育の中では「できない」と無能感を感じた子どもは、その気持ちを積み重ねていくうちに「嫌い」になるのではないだろうか。生涯にわたって運動に親しむ子どもを育てるために、指導者が重視すべきことを検証したいと考えた。

幼児期運動指針(文部科学省, 2013)には「幼児にとって体を動かす遊びなど、思いきりのびのび

と動くことは、何事にも意欲的に取り組む態度を養い、健やかな心の育ちも促す効果があります。積極的に体を動かす幼児は『やる気』『我慢強さ』『友だち関係が良好』『社交的』など前向きな性格傾向にあります。」と書かれており、文部科学省(2011)の調査では、体を活発に動かす頻度が高い幼児ほど不活発な幼児に比べて「いつもやる気がある」比率が高くなっていることが明らかになっている。したがって、体を動かす遊びを楽しみながら、前向きな性格傾向がもてるような成功体験を積むための工夫はもちろん、発達の特徴が異なる幼児と一緒に体を動かして遊べるような環境作りが重要である。

小学校学習指導要領解説「体育編」で平成20年に改訂された内容は、第1・2学年の領域は「〇〇遊び」(「体づくり運動」についても『体ほぐしの運動』と『多様な動きをつくる運動遊び』で構成)になっており、児童が易しい運動に出会い、伸び伸びと体を動かす楽しさや心地よさを味わう「遊び」であることが強調されている。一方、幼稚園教育要領や保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、『健康』の領域のねらいとして、自分の体を十分に動かし、幼児が体を動かす気持ちよさを感じることを通じて、進んで体を動かそうとする意欲などを育てることの大切さが明記されている。このように、幼児期の取組は、小学校・中学校・高等学校の体育科・保健体育科の土台となるものである。

幼児期の発達の特性としては、身体が著しく発育するとともに、運動機能が急速に発達する時期であり、大人への依存を基盤としつつ、自立へ向かう時期であると言われる。また、自発的な活動としての遊びにおいて、幼児は心身全体を働かせ、様々な体験を通して心身の調和のとれた全体的な発達の基礎を築いていく時期でもある。

その意味で、自発的活動としての遊びは、幼児特有の学びである。幼児は、言語能力が伸びるにつれて、自分の行動を制御するようになるとともに、社会性、道徳性が培われる。そのことは、より友だちと積極的にかかわろうとする意欲を生み、さらに、友だちと遊ぶことを通じて運動能力が高まる。そして、より高度で複雑な遊びを展開することで、思考力が伸び、言語能力が高まる。幼児はその遊びの中から、学びの芽生えとなるものを自分で獲得していくのである。幼児が遊び込み、充実した経験をするのが重要で、それが小学校の自覚的な学びへとつながっていく。そのため、お互いがお互いの取組を知り、保育所・幼稚園等から小学校へのスムーズな連携を意識した取組を進めていく必要がある。体育科の学習内容の系統性を意識するとともに、幼児が就学前にどんな経験をして、どんな技能を身に付けてきたのか、または身に付けていないのかを把握し、実態に応じた取組を行う必要がある。そのために基本の動き36パターン(中村ら2008)を調査する。幼児期運動指針(文部科学省,2013)には「幼児期は運動機能が急速に発達し、多様な動きを身に付けやすい時期です。(中略)多様な運動刺激を与えて、体内に様々な神経回路を複雑に張り巡らせていくことが大切です。それらが発達すると、タイミングよく動いたり、力の加減をコントロールしたりするなどの運動を調整する能力が高まり、普段の生活に必要な動きをはじめ、とっさのときに身を守る動きや将来的にスポーツに結び付く動きなど基本的な動きを多様に身に付けやすくなります。」と明記されている。これらのことを踏まえて、この研究では、幼児期の運動遊びと小学校体育科の中の体づくり運動をつなげるための方法を考える。

表1 体育科・保健体育科の系統図

ア 体ほぐしの運動 イ 多様な動きをつくる運動遊び (ア)体のバランスをとる運動遊び (イ)体を移動する運動遊び (ウ)用具を操作する運動遊び (エ)力試しの運動遊び	保育所・幼稚園等 幼児期(3~6才)		小学校 1・2年 3・4年 5・6年			中学校 1・2年 3年		高等学校 入学年度 それ以降	
	(ア)体のバランスをとる運動遊び (回る、寝ころぶ、起きる、座る、立つ等の動きや バランスを保つ動き) (イ)体を移動する運動遊び (はう、歩く、走る、跳ぶ、はねる等の動き) (ウ)用具を操作する運動遊び (用具をつかむ、持つ、降ろす、回す、転がす、くぐる、 運ぶ、投げる、捕る、跳ぶ、用具に乗る等の動き) (エ)力試しの運動遊び (人を押す、引く、運ぶ、支える等したり、力比べを したりする等の動き)	心身の調和のとれた 発達の基礎を培う時期		様々な動きを身に付ける 時期 多くの運動を体験する時期			自分に合った運動を選び 深める時期		
	体づくり運動		体づくり運動			体づくり運動		体づくり運動	
	器械・器具を 使ったの 運動遊び		器械運動			器械運動		器械運動	
	走・跳の運動遊び		走・跳の運動			陸上運動		陸上競技	
	水遊び		浮く・泳ぐ運動			水泳		水泳	
	表現・リズム遊び		表現運動			表現運動		ダンス	
	ゲーム		ゲーム			ボール運動		球技	
						武道		武道	
			保健			保健分野		科目保健	

2 研究仮説

保育者が、小学校体育科のみならず生涯スポーツへ繋げることを意識し、多様な動きを意図的に保育内容に取り入れ、環境構成を工夫することで、幼児の主体性が高まる。

本研究では、これらの仮説を検証するために、以下のことを行う。

- ・高知県の全国体力調査結果の分析
- ・抽出保育所における体を動かす遊びの観察・記録・分析(介入前後)
- ・多様な動きを取り入れた運動遊びの実施・分析

※幼児の主体性

「自ら意欲をもって環境と関わり、遊びを十分に心ゆくまで楽しむ」

3 研究方法

(1) 高知県の「全国体力調査」結果の分析

- ア 対象 小学校
- イ 時期 6月～7月
- ウ 方法 過去5年間(平成22年度～26年度)の全国体力調査結果と、全国平均との比較検証をする

(2) 抽出保育所における保育者による体を動かす遊びの観察・記録・分析①(介入前)

- ア 対象 保育所Ⅰ・Ⅱの年長児6名(各園3名)※担任らが抽出
抽出児A 運動が好きで、普段から積極的に身体を動かしている
抽出児B 運動に対しては、やや積極的である
抽出児C 運動に対しては、あまり積極的でない (以下、A・B・Cとする)
- イ 時期 7月～8月
- ウ 回数 8回(各園4回)
- エ 方法 保育(9時半～11時)での運動遊び等の活動を観察・記録し、基本の動き36パターン(図1)の種類を分析する



図1「幼児期に身に付けるべき基本の動き36パターン」中村和彦ら(2008)

(3) 抽出保育所における研究生による運動遊びの実施・分析

- ア 対象 年長児(うち万歩計を装着したのは6名、各園3名)※(2)で抽出した子ども
- イ 時期 9月～10月 午前中の遊びの時間の30分間
- ウ 回数 6回(各園3回)
- エ 方法 (1)の全国体力調査結果の分析と、(2)の実態調査、様々な先行研究や研修会などをもとに、多様な動きを取り入れた運動遊びを研究生が実施し、分析する

(4) 抽出保育所における保育者による体を動かす遊びの観察・記録・分析②(介入後)

- ア 対象 年長児6名(各園3名)※(2)で抽出した子ども
- イ 時期 10月～11月 9時半～11時
- ウ 回数 6回(各園3回)
- エ 方法 主体的に遊びを選ぶ時間での基本の動き36パターン(図1)の種類、遊びを継続した時間を分析する

4 結果と考察

(1) 高知県の「全国体力調査」結果の分析

表2 平成26年度小学校学年別・性別の偏差値（高知県）

調査項目	学年	小1男	小1女	小2男	小2女	小3男	小3女	小4男	小4女	小5男	小5女	小6男	小6女	全学年平均
握力		48.7	48.8	48.2	49.6	49.3	49.4	48.4	48	48.7	48.8	49.4	48.4	48.8
上体起こし		50.4	50.9	49.5	50	50.6	50.6	48.4	49.5	48.8	48.4	49.3	48.4	49.7
長座体前屈		51.1	51.4	50.5	50.7	50.7	50.9	49.2	49.6	50.4	50.2	50.5	48.9	50.3
反復横跳び		48.2	49.6	49.4	51.1	49.3	50.5	47.9	49	48.8	48.4	48	48.4	49
シャトルラン		49.4	50.8	48.5	50.6	48.1	50.6	47.3	48.9	47.3	48.3	47.6	47.9	48.8
50m走		52.1	51	52.1	51.4	51.7	51.8	53.6	53.1	53.2	52.7	53	53.4	52.4
立ち幅跳び		47.1	48.4	47.6	48.7	47.8	48.6	47.2	48.2	47.6	48.1	48	46.5	47.8
ボール投げ		51	50.6	48	49.4	49	50.8	47.3	49.6	47.2	49.7	47.5	48.7	49.1
合計点		48.6	50.3	48.1	49.8	48.8	49.9	46.1	47.9	47.1	47.9	47.1	46.8	48.2

*網掛けは偏差値が50以上（高知県教育委員会事務局スポーツ健康教育課HPより）

表3 体力・運動能力調査項目と評価内容の対応関係

調査項目	運動能力評価	体力評価		運動特性
握力		筋力	大きな力を出す能力	力強さ
上体起こし		筋力	大きな力を出す能力	力強さ
		筋持久力	筋力を持続する能力	ねばり強さ
長座体前屈		柔軟性	大きく関節を動かす能力	体の柔らかさ
反復横跳び		敏捷性	すばやく動作を繰り返す能力	すばやさ
				タイミングの良さ
シャトルラン	走能力	全身持久力	運動を継続する能力	ねばり強さ
50m走	走能力	スピード	すばやく移動する能力	すばやさ
				力強さ
立ち幅跳び	跳躍能力	瞬発力	すばやく動き出す能力	力強さ
				タイミングの良さ
ボール投げ	投球能力	巧緻性	運動を調整する能力	力強さ
		瞬発力	すばやく動き出す能力	タイミングの良さ

（文部科学省「子どもの体力向上のための取組ハンドブック」より）

（高知県教育委員会事務局スポーツ健康教育課HPより）

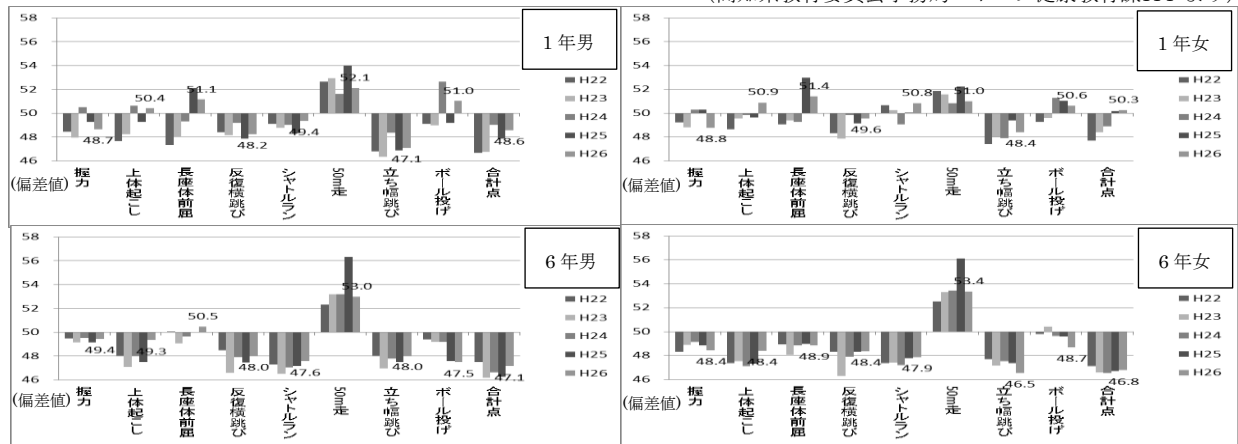


図2 平成22年度～26年度までの全国体力調査結果

(ア)表2「小学校学年別・性別の偏差値」と表3「体力・運動能力調査項目と評価内容の対応関係」から

- ・表2から全学年が平均を上回っている項目は「50m走」である。また、全学年の平均を見ると「50m走」の52.4に次いで「長座体前屈」も50.3と偏差値50を超えている。この二点を、表3に照らし合わせると「スピード」「柔軟性」については一定の運動能力があると判断できる。
- ・全学年が平均をやや下回っているのは、「握力」「立ち幅跳び」である。また、全学年の平均で見ると、「シャトルラン」も48.8と「握力」と同じ値である。この二点を、表3に照らし合わせると「筋力」「瞬発力」「全身持久力」には少し課題がある。
- ・第1学年から男女ともに「握力」「反復横跳び」「立ち幅跳び」は低い。幼児期では「筋力」「敏捷性」「瞬発力」は発達途中であるが、全国平均より低いことには注目すべきである。

(イ) 図2「平成22年度～26年度までの全国体力調査結果」から

- ・過去5年間を見ても、課題項目に大きな変化はない。この5年間、継続して良かった項目は「50m走」である。近年運動時間が少なくなっている中でも、もっとも基本的な動きである「走る」ことは日常生活に経験として多いことが考えられる。

(2) 抽出保育所における体を動かす遊びの分析(介入前)

ア「基本の動き36パターン」の種類について

表4 保育所I・IIにおける抽出児(A、B、C)の動きの種類

	基本の動き36	A (I)	B (I)	C (I)	A (II)	B (II)	C (II)	合計数	
姿勢の変化や安定性を伴う動作	回る	○			○		○	3	
	起きる						○	1	
	立つ	○	○	○	○	○	○	6	
	組む	○	○		○	○		4	
	渡る	○	○	○	○	○	○	6	
	逆立ち								
	ぶら下がる								
	乗る	○	○	○	○	○	○	6	
	浮く	○	○				○	4	
	はう	○	○	○				3	
重心の移動を伴う動作	歩く	○	○	○	○	○	○	6	
	のぼる	○		○	○	○	○	5	
	とぶ(垂直に)	○	○	○	○	○	○	6	
	跳ねる	○	○	○	○	○	○	6	
	走る	○	○	○	○	○	○	6	
	くぐる				○		○	2	
	泳ぐ	○	○		○		○	4	
	すべる	○			○			2	
	人や物を操作する動作	掴む	○	○	○	○	○	○	6
		持つ	○	○	○	○	○	○	6
投げる									
蹴る		○	○		○	○	○	5	
当てる									
とる					○			1	
ほる									
振る					○		○	2	
運ぶ					○	○		2	
渡す									
支える					○	○		2	
積む									
倒す									
押す		○						1	
押さえる		○	○	○				3	
引く					○	○		2	
打つ				○		○	2		
こぐ									
合計数		19	15	12	23	15	18		

※網掛けは合計数が5以上

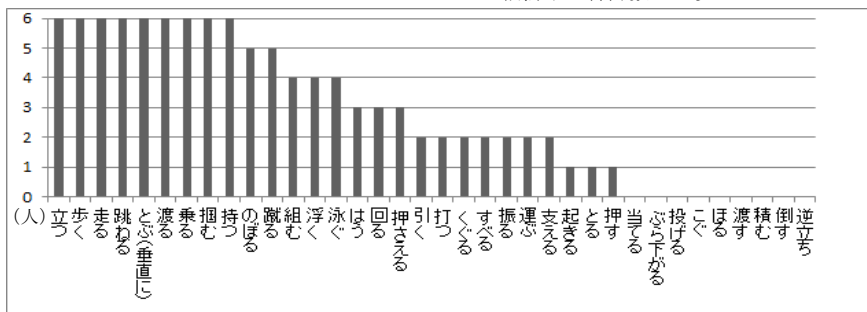


図4 抽出児の動きの種類(人数)

- ・すべての抽出児に見られた動きは「立つ」「歩く」「走る」等の9パターンあり、6人中5人に見られた動きは「のぼる」「蹴る」の2パターンだった。
- ・すべての抽出児にほとんど見られない動き(1人以上2人以下)は「引く」「打つ」「くぐる」など10パターンあり、全く見られなかった動きは、全体の36パターン(図1)のうち9パターンにもなる。これらを合わせると19パターンになり、基本的な動きの半数を超える。これは、

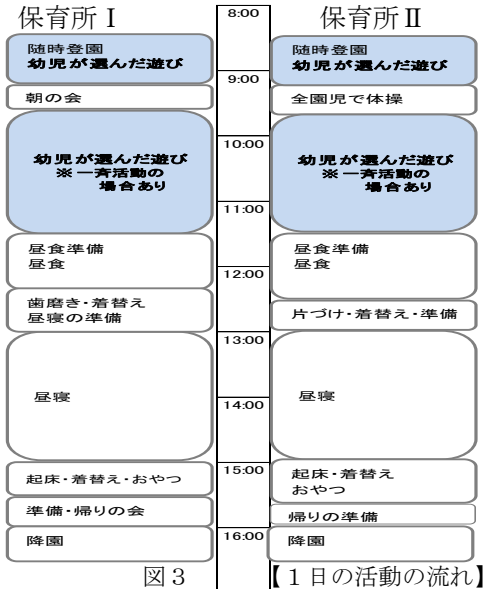


図3

【1日の活動の流れ】

※補足

上の図は、保育所I・IIの一日の活動の流れである。共に午前中の活動は、「幼児が選んだ遊び」が主である。研究(2)～(4)のすべてを、この「幼児が選んだ遊び」の9時半～11時半に行った。この時間は、自由に園庭に出て遊んだり、教室でままごとや、製作、お絵かき等をしたり主体的に過ごすことができる。約2時間たっぷり自分がやりたいことを主体的に選んで遊びを充実させるために、保育者の意図的計画的な環境構成の工夫や援助が重要である。

観察の時期が限定されていたこともあるが、今後遊びの中の「基本的な動き」に、多様な動きを引き出すためのレパートリーやバリエーションを仕組んでいくことで、遊びの中に取り入れることが可能であると考えられるものである。

- 全く見られなかった動きと、表2から読み取れる「第1学年から男女ともに『握力』がやや低い」こととは繋がりが考えられる。つまり「握力」がやや低いのは、幼児期に「とる」「押す」「当てる」「ぶら下がる」「投げる」等の手や腕の筋力を使う機会が少ないことが関係しているのではないだろうか。幼児期の取組によっては、握力の向上に繋がる可能性があると思われる。
- 図4の動作を大きく三つに分類すると、一番多いものは「重心の移動を伴う動作」で、「人や物を操作する動作」が少ないことが分かる。これは、上記に述べた「握力」の数値とも関連するのではないだろうか。つまり、人や物を操作する「手」の動きを多く取り入れていく必要性が考えられる。また、5歳児の発達段階の「運動機能はますます伸び、大人が行う動きのほとんどができるようになる」「手先の器用さが増し、(中略)様々な用具を扱えるようになる」(保育所保育指針より)ことを考えると、これらの動きは、より多く経験させたい活動である。

イ「基本の動き 36 パターン」の頻度

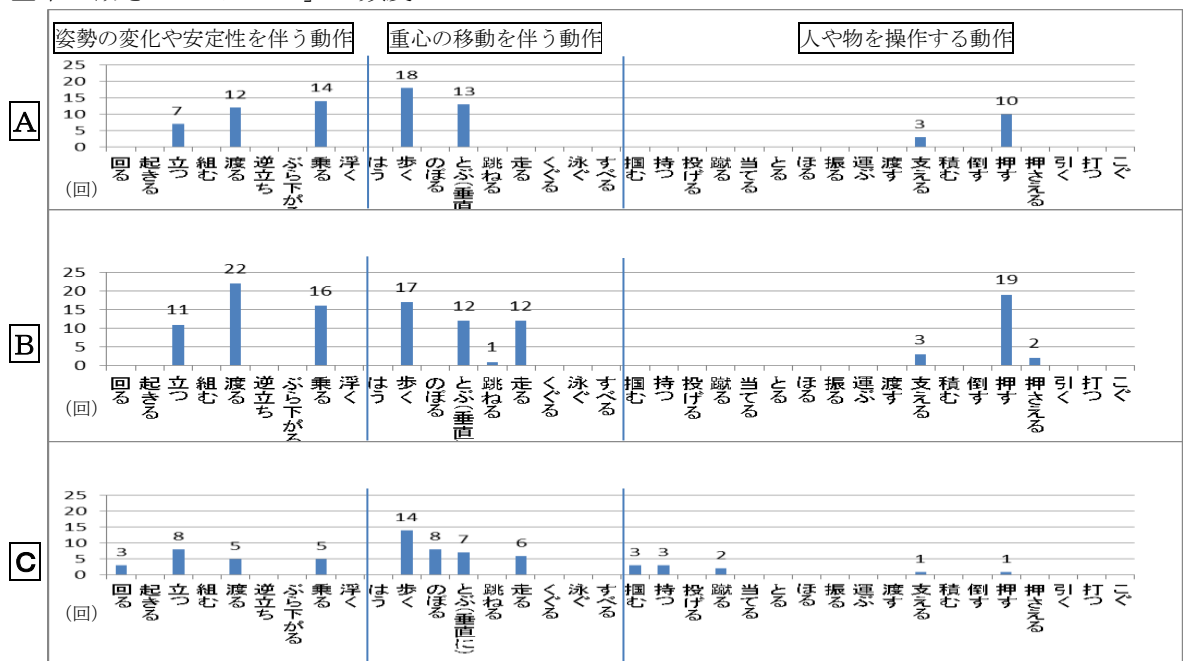


図5 保育所Ⅱの抽出児の動きの回数(室内遊びの5分間)

- CはAやBと比べて、「渡る」「乗る」等の頻度が少ない。これは、Cが苦手意識のある平均台を渡ることを避けたためであると考えられるが、発達段階からするといろいろな動きを経験させたい時期である。
- 3名とも「姿勢の変化や安定性を伴う動作」「重心の移動を伴う動作」が多かったが、「人や物を操作する動作」はほとんど見られなかった。室内遊びという限られた場ではあるが、たった5分間でもこれだけの差が確認できたことから、「人や物を操作する動作」が経験できるような環境構成が必要だと感じる。

(3) 抽出保育所における研究生による運動遊びの分析

ア 保育所Ⅰ 取組の流れ (別紙1参照)

ねらい 友だちや保育者と一緒に、いろいろな動きを取り入れて遊ぶことを楽しむ。
 内容 はしごや平均台の上を渡ったり、物を投げたり跳んだりして、忍者になりにきって遊ぶ。

イ 保育所 I の C の動きと幼児理解 [研究方法(2)と研究方法(3)の比較] (別紙2から抜粋)

Cの動き ※下線は「心情・意欲・態度」が表れている箇所	幼児理解
<p>研究方法(2)</p> <p>「リズム遊び」</p> <p>・「ギャロップ」のときは、壁にもたれて立っていた。保育者が「Cくん」と呼びかけると、「<u>できん</u>」と言って、そのままみんなが跳ぶのを見ていた。話はよく聞いていて、できることに参加していた。「スキップ」にも参加したが、<u>途中でその場で回る等、難しい動きの時は止まっていた。表情は硬かった。</u></p> <p>「ドンジャンゲーム」</p> <p>・1回目はじゃんけんに勝ったが、<u>ルールが分からない様子でその場に立っていた。後ろの友だちに背中を押されてから進み始めた。2回目は、前の人の方が分からず、スタートにいたら負けてしまった。そのことを友だちに責められて、押されたが、何も言い返さなかった。チームが勝って、他の子が喜んでいる時も感情を表に出さなかった。</u></p>	<p>○やれることに挑戦しようとしていることから、できないことをできるようになりたいと思っているのではないか。</p> <p>○ゲームのルールが分からないために戸惑い、友だちにも責められて、悔しい思いをしているのではないかと。</p>
<p>研究方法(3) 忍者遊び</p> <p>「忍者遊びのコース作り」</p> <p>・巧技台を組み立てるときには、自分が興味のある一本橋を持って、<u>友だちと一緒に取り付ける等自分から積極的に、コースを作っていた。保育者に、自分の思いも伝えていた。</u></p> <p>「綱引き」</p> <p>・綱引きの場に行くが、他の子がやっつるのを<u>じっと見ていた。なかなか声をかけられず、持つ場所を探していた。空いている場所を見つけて縄を掴んだ後は、友だちに「(一緒に)やろう」と自分から言った。「うー」と声を出し、「ファイトー、こっち手伝って」と友達を誘う。何度も何度も繰り返して綱を引いていた。勝つと、「やったあ」と声を出していた。巧技台等で遊んでいても、「手伝いに来ました」と劣勢の方を手伝ったり、「先生、2人でやろう」と保育者を誘ったりもしていた。勝負している時、「先生、もっと本気出して」と3回言っていた。</u></p>	<p>○忍者修行の場面を見て、やってみたいと感じ、自分の思いを友だちや保育者に言葉で伝えたり、一緒に作ったりと楽しんでたようだ。</p> <p>○綱を引くシンプルな遊びは分かり易いため、Cにとって挑戦しやすく、長い時間、遊び続けていたのではないかと。友だちにも自分から言葉をかけたり、気持ちを声に出したりしていることから楽しんでたのではないだろうか。</p>

研究方法(2)では、担任による一斉保育が行われた。その環境の中で、Cは初めて経験することにすぐに入れなかったり、できないことがあったりした。また遊びのルールが理解できずに友だちに責められ、自信を失っている様子が見られた。しかし、やれることはやろうとする意欲があった。

研究方法(3)の研究生による運動遊びでは、始めに巧技台を組み立てたが、意欲的に活動していた。初めての綱引きにもすぐに加わり、何度も繰り返していた。また、友だちや保育者に自分から積極的に話しかけ、大きな歓声を上げる等、笑顔が見られた。主体的なCの姿が見られたのは、自分で遊びの場を作ったり遊びを選んだりすることができ、自由度が高く安心して遊べる環境があったからだと思われる。

ウ 保育所Ⅱ 取組の流れ（別紙3参照）

ねらい 友だちや保育者と一緒に、おもいきり体を動かしながら、ルールのある遊びを楽しむ。

内容 けいどろ遊びを通して、追いかけたり逃げたりしながら力いっぱい走ったり、友だちと相談して遊びのルールを変えたりして遊ぶ。

エ 保育所ⅡのCの動きと幼児理解〔(研究方法(2)と研究方法(3)の比較) (別紙4から抜粋)

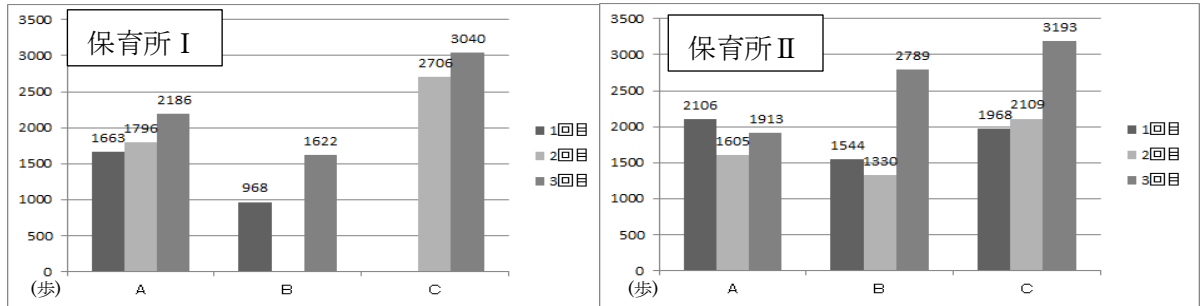
Cの動き ※下線は「心情・意欲・態度」が表れている箇所	幼児理解
<p>研究方法(2)</p> <p>「体操」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者が話し始めると、<u>Cは寝ころんだ</u>。話が終わり、保育者の「足を伸ばします」の声から、<u>体操をやり始めた</u>。「立ちましよう」の声で、<u>ゆっくり最後に立った</u>。始めは体操をしていたが、<u>最後はあまり動かなくなっていた</u>。 <p>「水遊び①」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周りの子が大きな声を出すと、<u>耳を手で塞いでいた</u>。水中に入ると、<u>勢いよく跳びこんだ</u>。保育者が「(カニ歩きが) Cくん、うまい」と言うと<u>何度もやっていた</u>。自由時間になると、いろいろな人に<u>水をかけていたため「やめて」と言われていた</u>。その後、「<u>プールから出る</u>」と保育者に<u>言い</u>、シャワーを浴びて出た。 	<p>○注意される話は聞きたくないと思ったのではないだろうか。その後、体操には参加していたが、あまり気持ちが入っていなかったようだ。みんなと一緒にすることに興味を示さない様子が見られた。</p> <p>○大きな声が苦手なようだ。カニ歩きを褒められたことで満足感を得て続けていたのではないか。友だちと遊びたい気持ちが水をかける行為になっているのではないか。</p>
<p>研究方法(3) けいどろ遊び</p> <p>「遊びのルール」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・警察役を選んだときは、泥棒役が動き始めたら、<u>必ず全力で走って行って捕まえようとした</u>。 ・泥棒役を選んだときは、捕まった<u>仲間をどンドン助けに行った</u>。それが原因で捕まってしまうが、「<u>誰か助けてー</u>」と<u>大声を出して仲間を呼び、跳びながら手を激しく振っていた</u>。安全地帯の<u>場所を移動したり、安全地帯の中で友だちと抱き合ったり</u>していた。 <p>「友だちとの関係」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・助けにきた泥棒から陣地を守ろうと、<u>友だちと手をつないでガードしていた</u>。 ・途中、「タッチした、してない」で<u>友だちと言い合いになった</u>。<u>強く言われたので、泣きそうになり目をこすっていたが、自分の思いを出していた</u>。 ・友だちに捕まえられたとき「痛い、○○ちゃん」と、<u>タッチが痛かったことをきちんと伝えていた</u>。 ・嫌なことがあって、遊びに入れなくなっていた友だちに「<u>○○くん、どうした?</u>」と聞いていた。 	<p>○遊びのルールがすぐに分かり、自分で警察役や泥棒役が選べる等、自己決定の場があったことから、Cは遊びに熱中することができたのではないか。</p> <p>○同じ泥棒役の子どもと助けたり助けられたりすることや、同じ安全地帯の中に入り、うまく逃げることでできた喜びを共感しているようだ。</p> <p>○仲間との協力が必要な遊びのため、自然に手をつないだりしながら関わりがもてたのではないか。</p> <p>○それまでは友だちに自分の気持ちを言葉で話すことが少なかったが、楽しいことを続けたい思いから、きちんと伝えることができたのではないか。</p> <p>○気持ちが解放されて、遊びの中でも自分の思いが出せるようになってきたのではないか。</p> <p>○自分が遊びの中で満たされていたため、友だちのことにも気持ちを寄せることができたのではないだろうか。</p>

研究方法(2)では、担任による保育が行われた。その環境の中で、Cはみんなと一緒に何かをすることに興味を示さなかった。また、特に気になったのは、友だちとの関わり方である。友だちと一緒に遊びたいとき、言葉が出ずに、水をかけたり、追いかけたりしていた。そのため、「やめて」と否定される言葉を友だちから言われることが多かった。しかし、研究方法(3)の研究生による運動遊びでは、はじめは建物の陰から様子を伺っていたが、すぐに遊びに夢中になっていた。それは、役割や走るコースなどの作戦を選べる自己決定の場があったことや、友だちとの関わる楽しさを感じられる遊びだったからである。警察役のときには、一緒に声をかけ合って泥棒を捕まえたり、泥棒役のときには、仲間を助けるために陣地に走ったりとその姿は、生き生きとしていた。

両園のCともに、実践を通してずいぶん変容した。これは、遊びの中に多様な動きを仕組んだ環境構成の工夫があり、それが一人一人の発達に応じたものになっていたためである。遊びの中での多様な動きには2つの意味があり、環境の構成を少し工夫することで、右の表のように多様なレパートリーやバリエーションが生まれ、子どもたちの経験を増やすことに繋がった。

○レパートリーの多様さ	○バリエーションの多様さ
①忍者遊び 渡る、乗る、歩く、はう、 掴む、持つ、投げる、跳ぶ、 当てる、引く 等	①忍者遊び 上下、左右、斜め、リズム カル、強く弱く、力に変化を つけて 等
②けいどろ遊び 走る、歩く、立つ、組む 乗る、掴む、持つ、等	②けいどろ遊び 直線的、曲線的、左右 速く遅く、タイミング 等

オ 運動遊び(30分間)での万歩計の歩数



(ア) 保育所 I から

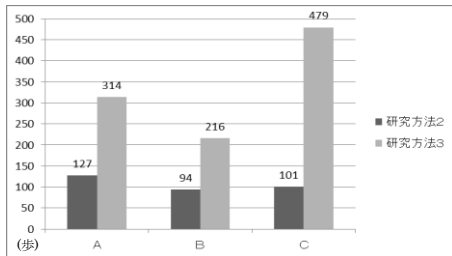
- ・ 3人の平均値は、1回目は1316歩、2回目は2251歩、3回目は2283歩だった。1回目から2回目には平均935歩増え、2回目から3回目では、平均32歩増えていた。3回目は隠れ身の術が加わったことで、「はう」動きが加わった反面、歩数が伸びなかったと見られるが、抽出児らは、遊びの経験が増えるごとに歩数が多くなっていた。これは動きが多くなるように物的な環境構成を工夫したことや、子どものアイデアを生かして場を設定し、子どもの意欲が高まったためであると考えられる。
- ・ 特に注目したいのはCである。Cは以前、朝の自分で遊びを選ぶ時間に、ブロックで一人遊びをすることが多かった。一斉保育の運動遊びでも、列の順番を友達に譲ったり、外れてやらなかったりしていた。しかし、この忍者遊びでは、抽出児の中で2・3回目の歩数が最も多いことが示しているように、自分から進んで巧技台を組み立てたり、遊び場を選択して繰り返し遊んだりするなど積極的な姿が見られた。この遊びの中で、Cは自分で主体的にやりたい遊びを選んだり、友だちと触れ合い、一体感を味わったりする経験ができたことが考えられる。

(イ) 保育所 II から

- ・ 3人の平均値は、1回目は1873歩、室内で行った2回目は1681歩、3回目は2632歩だった。園庭で遊んだ1回目から3回目では、平均759歩増えていた。
- ・ 2回目は室内だったため、1回目よりもほとんどの子の歩数が減り、平均すると192歩少なくなっていた。室内では運動遊びを行っても、意図的・計画的に環境構成を仕組まなければ、子どもの動きはさらに少なくなってしまう。特に雨が多い季節は、室内で多様な動きができる遊びを考える必要があることが分かる。

- ・ 1回目と3回目を比べると、A以外の2人の歩数が多くなっており、特にCの歩数が増えた。7月頃のCは、一斉の運動遊びはやらないこともあり、プール遊びでも先に出てしまうことがあった。しかし、けいどろ遊びでは最後まで楽しそうに遊んでいた。Cは、泥棒役をほとんど選んでいることから推測すると、警察役から逃げ回ったり、陣地に捕まった仲間を助けに行ったりするスリル感を味わうことを楽しんでいたのである。運動能力の個人差に左右されないこのけいどろ遊びを通してCは、体をおもいきり動かす心地よさだけでなく、友だちと一緒にルールのある遊びをする楽しさも経験していた。

カ 保育所 I 抽出児らの歩数「研究方法(2)」と「研究方法(3)」5分間の平均の比較



研究方法(2)は、保育者主導で室内で巧技台等を使つての運動遊びを行い、3名の平均歩数は107回であった。研究方法(3)は、同じ室内で巧技台等を使つての運動遊びであったが、子どもの意見を取り入れて遊び(コース)を増やしたことや、子どもが場所や時間(回数)を主体的に選び、遊ぶことができる環境にしたため、歩数が大きく伸びたと考えられる。

図7 抽出児の歩数

(4) 抽出保育所における保育者による体を動かす遊びの分析(介入後)

ア 「基本の動き36パターン」の種類について

表5 保育所 I・IIにおける抽出児(A、B、C)の動きの種類

	基本の動き36	A (I)	B (I)	C (I)	A (II)	B (II)	C (II)	合計数
姿勢の変化や安定性を伴う動作								
回る	○	○	○	○	○	○	○	5
起きる	○	○	○	○	○	○	○	5
立つ	○	○	○	○	○	○	○	6
組む	○	○	○	○	○	○	○	4
渡る			○	○	○	○		4
逆立ち								
ぶら下がる	○	○	○	○		○		4
乗る	○	○	○	○	○	○	○	6
浮く								
はう	○			○				2
重心の移動を伴う動作								
歩く	○	○	○	○	○	○	○	6
のぼる	○	○	○	○	○	○	○	6
とぶ(垂直に)	○	○	○	○	○	○	○	6
跳ねる	○	○	○	○	○	○	○	6
走る	○	○	○	○	○	○	○	6
くぐる	○	○	○	○				3
泳ぐ								
すべる				○	○			3
人やお物を操作する動作								
掴む	○	○	○	○	○	○	○	6
持つ	○	○	○	○	○	○	○	6
投げる	○	○	○	○				3
蹴る	○	○	○	○		○		4
当てる	○	○	○	○				3
とる	○							2
ほる			○					1
振る							○	1
運ぶ			○		○		○	3
渡す	○							1
支える	○				○	○	○	4
積み								
倒す					○	○	○	3
押す			○	○	○	○	○	5
押さえる			○	○	○		○	4
引く	○	○	○	○	○	○		5
打つ				○				1
こぐ			○	○				2
合計数		22	23	23	21	19	18	

※網掛けは合計数が5以上

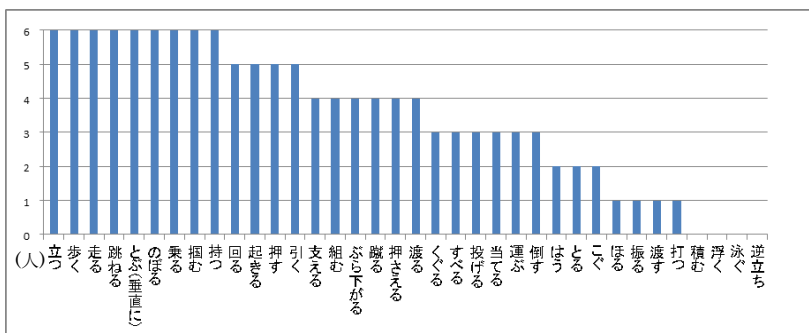


図8 抽出児の動きの種類(人数)

(ア) 研究方法(2)の結果と比較

- ・研究方法(2)の主體的に遊びを選ぶ時間では、基本的な動きである「立つ」「歩く」がほとんどであったが、研究方法(4)では、保育者が子どもの思いや願いに寄り添いながら、環境構成を工夫したり、ルールを一緒に作っていったりしたことで、子どもたちが主體的に動いたため、動きの種類が多くなった。
- ・研究方法(2)では、ほとんど見られなかった「人や物を操作する動作」が研究方法(4)では多く見られた。これは、保育者が経験させたい活動を仕組んだ結果だと思われる。このことから、多様な動きを経験させることを視野に入れ、保育者が環境構成の工夫や援助をしていくことが大切であることが分かる。
- ・全く見られなかった動きは9パターンから4パターン(「浮く」「およぐ」を含む)になり、ほとんど見られなかった動き(1人以上2人以下)も10パターンから7パターンに減った。

イ 遊びを継続した時間

表6 保育所Ⅱの抽出児の遊んだ時間

	A	B	C
1回目	47分	57分	55分
2回目	22分	22分	22分
3回目	44分	25分	42分

- ・保育所Ⅱでは、研究方法(3)のけいどろ遊びを継続して、保育者がけいどろ遊びを行った。主體的に遊びを選ぶ時間に、保育者が「けいどろをしよう」と呼びかけた。3名の抽出児が遊びを継続した時間は、1回目の平均は53分、2回目の平均は22分、3回目の平均は37分だった。1回目、BとCは約一時間も遊んでいたことになり、けいどろ遊びに夢中になっていたことが確認できる。2回目は、保育者が勝敗も経験させたいと考え、役割を固定化し、時間を制限して勝敗をつけた。すると、勝ち負けに強くこだわることによりトラブルが増え、遊びが続かなかった。その様子を見て、子どもの育ちに合わないと感じた保育者が、3回目は今までのルールに戻すと、また遊ぶ時間が増えた。(Bは、後半でトラブルがあり途中で遊びを止めてしまった。) このようにルールの提案も、子どもの育ちに即し、子どもの声を聞きながら、環境構成を工夫する必要がある。そして今後、この子どもたちに友だちと関わりながらルールを自分たちで考えたり、工夫したりすることができるような場をあえて仕組み、トラブルも一つのよい経験として乗り越えられる力も付けていく必要がある。

ウ 保育者へのアンケート

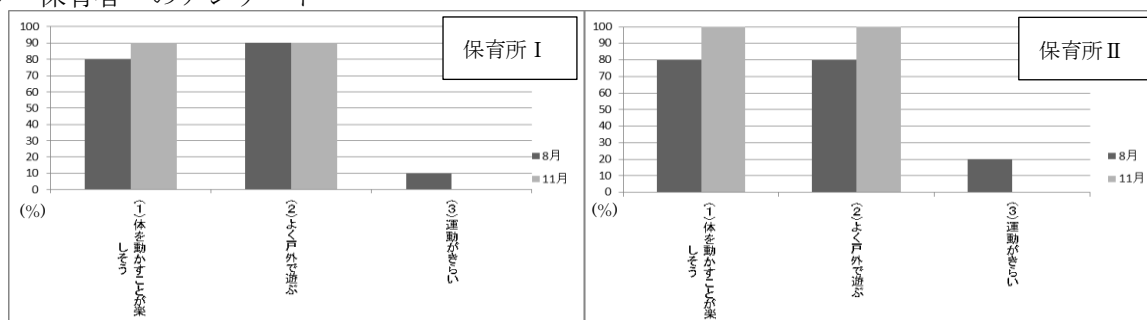


図9 保育者へのアンケート

- ・研究方法(2)と(4)の後、保育者にアンケートを行った。その結果、体を動かすことが楽しそうな子が増え、運動嫌いな子もなくなったことが分かった。また記述から、保育所Ⅱでは全員がよく戸外で遊ぶようになった。
- ・この実践を通して、保育所Ⅰ・Ⅱの保育者の意識が変わってきた。「体を動かす遊びや運動の内容を誰が決めているか」の質問に8月は、「大部分指導者で一部子どもたち」だったが、11月は「指導者と子どもたちが同程度」になり、子どもの思いや願いを取り入れようとしていることが分かった。このことは、子どもたちの主体性の伸びに繋がることが考えられる。
- ・保育者への聞き取りでも「自分の保育を振り返ることができた。苦手なことを無理にやらせ

るのではなく、子どもたちの見える所に用具を準備しておいたり、子どもたちがやりたくなつた時を見計らって一斉活動にしたりと、運動が好きになるような手立てを考えていく必要がある。」と話していた。

5 成果と課題

(1) 成果

- ・子どもが興味のある遊びを選択できたり、自分で興味のある遊びにしていったりすることで、運動が苦手と感じる子どもも主体的に遊びをするようになった。
- ・子どもの運動能力の実態に合わせて、保育者の願いや県の課題等を盛り込み、保育のねらいを考える。そして、子どもの思いや願いを取り入れながら、環境を構成していくことで子どもが遊び込むことに繋がり、運動量が多くなると共に多様な動きを経験することもできた。

(2) 課題

- ・「子どもが楽しんで、身体を動かすこと」が、子どもの主体性を伸ばすために大切な視点であるが、「〇〇をさせたい」「〇〇ができるようになってほしい」という保育者の思いが強いと、主体性が育ちにくくなる傾向がある。
- ・1つの同じ動きを繰り返し行うのではなく、どんな遊びも環境構成を工夫することで、レパートリーやバリエーションに変化をつけ、柔軟に取り入れていく保育者の意識が必要である。

(3) 今後の取組

- ・研究を通して、運動遊びに主体的に取り組む子どもの増加に繋がり、特に、運動に苦手意識がある子どもが大きく変容した。この多様な動きを取り入れた運動遊びの実践を基に、幼児期からの運動遊びの大切さを県下に広げるとともに、幼児期の運動遊びを生かした体育科の授業づくりを提案していきたい。

【参考・引用文献】

- 文部科学省(2011)：体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書
文部科学省 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議 (2010)：幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)
文部科学省(2008)：小学校学習指導要領解説「体育編」
文部科学省(2012)：子どもの体力向上のための取組ハンドブック
文部科学省 (2013)：幼児期運動指針
厚生労働省編(2008)：保育所保育指針解説書
文部科学省 (2008)：幼稚園教育要領解説
内閣府・文部科学省・厚生労働省(2015)：幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説
文部科学省 (2013)：指導と評価に生かす記録 幼稚園教育指導資料第5集
文部科学省 (2012)：スポーツ基本計画
高知県教育委員会 (2010～2014)：高知県体力・運動能力、生活実態等調査結果
高知県教育委員会 (2014)：高知県教育振興基本計画 重点プラン【改訂版】
独立法人日本スポーツ振興センター(2015)：学校管理下の災害
中村和彦監修(2008)：『あんふあん』フジサンケイ新聞社(2008年10月号より出典)
杉原隆・川邊貴子(2014)：幼児期における運動発達と運動遊びの指導
吉田伊津美(2015)：幼児期の運動遊び―幼児期運動指針に沿って―
押川朝子・尾中映里(2011)：スタートカリキュラム指導案集、高知県教育センター